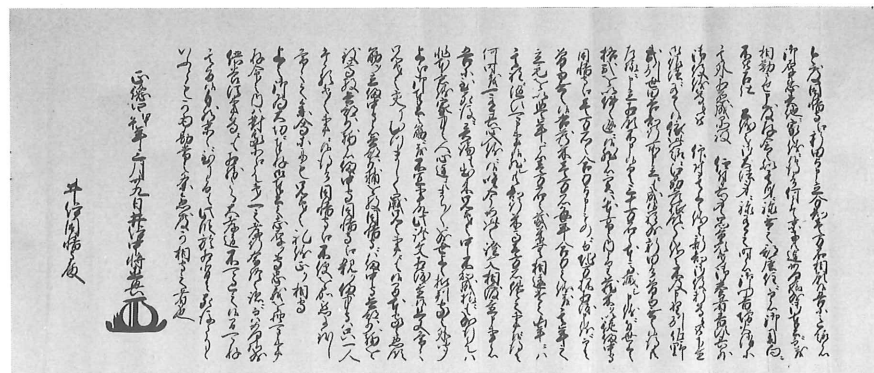
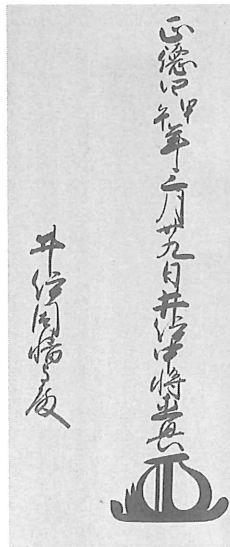
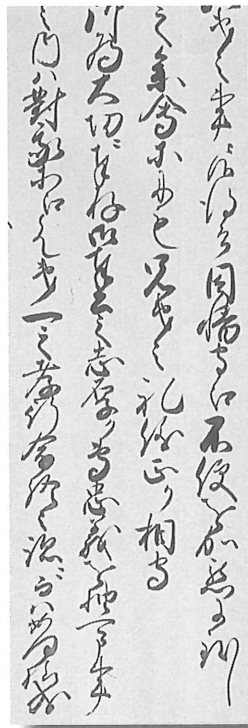


彦根城博物館だより

102

2013.9.1



資料紹介

井伊直興新田分知証文

当館蔵

彦根藩井伊家四代当主・井伊直興は家督相続に苦心した人物です。直興には、当主となり得る息子達がいましたが（直通、直恒、直矩、直惟、直定）、家督の継承は順調なものではありませんでした。元禄十四年（一七〇二）に直興は隠居しますが、跡を継いだ五代直通、六代直恒が相次いで死去したため、宝永七年（一七一〇）、再び当主に就きます。正徳四年（一七一四）二月、直惟へ家督を譲り再隠居した際、彦根藩から一万石を分知し、直定を藩主とする彦根新田藩を創設しています。分家創設により当主候補を増やし、血統の断絶を避ける狙いがあったと思われます。

写真は、同年三月二十九日、直興が因幡守（直定）へ宛てた証文です。三人の兄弟（越後国与板藩主・直矩、彦根藩主・直惟、彦根新田藩主・直定）の間では、分家（与板藩、新田藩）は本家（彦根藩）を立て、兄弟仲良く礼儀を守り、將軍家へ忠義を尽くすよう、直定へ命じています。

正徳四年当時、数え年で五十九才の直興に対し、直矩二十一才・直惟十五才・直定十三才と、息子達はいまだ若年でした。証文中、直興は自分の死後のことについてしきりに言及しており、年若い息子達と井伊家の将来を案じる、父直興の心情が読み取れる史料です。

（青木 俊郎）

企画展

9/20(金)～10/22(火)

展示室1  
近江と能 — 霊場・名所・物語 —

南北朝時代から室町時代初期、観阿弥・世阿弥によって大成された能は、江戸時代までは猿楽と呼ばれていました。中世には、寺社の祭祀に奉仕する猿楽座が各地に組織され、近江にも近江猿楽と呼ばれた6つの座がありました。これらの座は、日吉大社や多賀大社などで活発に活動したことが知られています。加えて、世阿弥の芸談集『申楽談儀』には、近江に赤鶴や愛智といった優れた面打がいたと記されるほか、能や狂言の演目には、近江の寺社や名所・旧



能面 翁(白狐) 多賀大社蔵



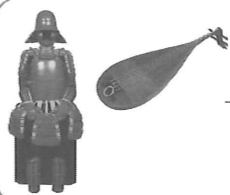
重要文化財 紅地花唐草入菱文唐織 政所八幡神社蔵

跡を舞台とした演目が複数あると言うように、近江は古くから能と深い関わりを持つ地域なのです。本展では、近江を舞台とする演目の中から「白鬚」〈竹生島〉〈三井寺〉を取り上げ、近江猿楽座に関する資料、および演目の舞台となった寺社にまつわる絵画、演目に使用する能面や能装束などを通して、近江と能の関わりを紹介します。



白鬚明神縁起 下巻 白鬚神社蔵

●ギャラリートーク●  
日時 9月21日(土) 14時  
講師 茨木 恵美(当館学芸員)



●●常設展示●●

“ほんもの”との出会い  
—彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に80点あまりを展示—

展示室2～3、5～6

\*10/25～11/26は展示室3、5～6のみ



催し

●第47回 彦根城能●

9月29日(日) 16時開演(15時30分開場)  
宝生流能 「井筒」 辰日満次郎  
和泉流狂言 「苞山伏」 小笠原 匡  
宝生流能 「小鍛冶」 白頭 宝生 和英

チケットA席(正面席) 5千500円

B席(脇正面席) 5千円 全席指定

\*チケットは本館受付および電話にてお求めいただけます。

\*開演時刻・演目・出演者等は、都合によりやむなく変更することがあります。

\*未就学児の入場はお断りいたします。



●入門講座・美術編●

第1回 華やかな能装束の世界

唐織をはじめとする能装束の種類や使用方法など、その基礎について紹介します。また、能舞台上がり、広さや音響効果などを体験します。

日時 10月5日(土) 14時～14時50分

講師 茨木 恵美(当館学芸員)

会場 当館講堂、展示室、能舞台

定員 15名 \*応募者多数の場合は抽選

申込方法

往復はがき往信の裏面に住所・氏名・電話番号を、復信の宛名面に住所・氏名を明記の上、「入門講座美術編係」までお申し込みください。

申込期間 9月1日(日)～9月20日(金)

当日消印有効

資料代 100円 \*別に観覧料が必要です

\*能舞台では白足袋または白靴下を着用してください。

10/25(金)～11/26(火)

展示室1・2

特別展 天下普請の城 彦根城

—世界遺産登録へ向けて—



国宝彦根城天守および国特別史跡彦根城跡を含む彦根城の遺構は、江戸時代の城郭の歴史を今に最もよく伝える歴史遺産として知られています。

戦国時代末期から江戸時代初頭の織田、豊臣、徳川政権による天下統一の過程で、信長、秀吉、家康らの天下入りにより、天守・本丸を核とした求心的な構造をもつ総石垣の城郭と、家臣と町人が集住する城下町が建設され、このような城郭と城下町が全国各地に広がりました。天守は、社会の軍事を独占する武家政権の権力・軍勢力を象徴するものでした。

彦根の地は、古くから日本列島の東西を結ぶ要地でした。関ヶ原合戦

後に、全国支配の確立を目指す徳川家康の政治・軍事戦略に基づき、家康の家臣にあつて最大の軍勢力を有した井伊家が城主として配され、幕府主導の「天下普請」により彦根城が築かれました。

本展示では、彦根城天守の構造、徳川家康の天下獲り戦略であつた城郭の「天下普請」の様相、さらには彦根城下町建設の様相を紹介し、彦根城築城の歴史的意義を明らかにします。

●ギャラリートーク●

日時 10月26日(土) 10時、14時

\*2回とも同じ内容です。

講師 渡辺 恒一(当館学芸員)

●シンポジウム●

天下普請の城 彦根城

彦根城の歴史の価値を問う

日時 11月2日(土)

13時～16時10分

会場 当館能舞台見所

パネリスト

三浦正幸氏(広島大学教授、建築史)

中井 均氏(滋賀県立大学教授、城郭史)

渡辺 恒一(当館学芸員)

定員 125名

資料代 300円

申込方法

往復はがき往信の裏面に住所・氏名・電話番号を、復信の宛名面に住所・氏名を明記の上、「特別展シンポジウム係」までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選します。彦根城博物館ホームページからも申し込みできます。

●申込期間

9月1日(日)～10月4日

(金) 当日消印有効

重要文化財 安土山下町中提書(前半) 近江八幡市立資料館蔵



テーマ展

11/29(金)～12/22(日)

展示室1  
橘と井桁

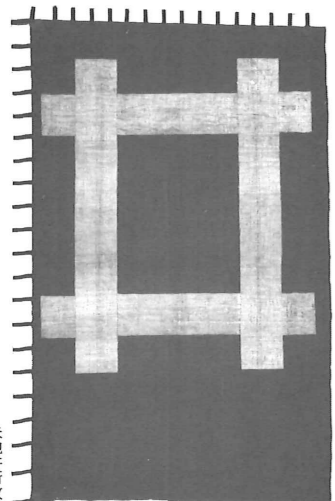
—彦根藩主井伊家の家紋—

彦根藩主井伊家は、「丸に橘」と、井の字を直線化した「井桁」を家紋として用いました。

武家の家紋は、旗印の図柄が起源といわれます。早い時期のものは、形が一樣ではなく、定型化が進むと同時に、装飾も加えられるようになってきました。



箱押橘形馬印



朱地井桁紋

本展では、橘と井桁があしらわれた品々を紹介します。形の違いをはじめ、さまざまに意匠化された家紋をじっくりご覧ください。

●ギャラリートーク●

日時 11月30日(土) 14時

講師 古幡 昇子(当館学芸員)

12月	11月	10月	9月
25水～31火 休館	29日 「橘と井桁」 彦根藩主井伊家の家紋 ギャラリートーク	26土 「天下普請の城 彦根城」 世界遺産登録へ向けて ギャラリートーク	7土 出張講座 「旭森地区の歴史」
14土 古文書のみかた⑧	16土 古文書のみかた⑦	12土 古文書のみかた⑥	14土 古文書のみかた⑤
テーマ展 橘と井桁 —彦根藩主井伊家の家紋— 11/29～12/22	特別展 天下普請の城 彦根城 —世界遺産登録へ向けて— 10/25～11/26	企画展 近江と能 —霊場・名所・物語— 9/20～10/22	テーマ展 源氏物語と伊勢物語 8/23～9/17
12/23・24 展示替により一部休室	11/26～28 展示替により一部休室	10/22～24 展示替により一部休室	9/17～19 展示替により一部休室

スケジュール

●出張講座「あなたの街の歴史探訪」●

公民館ごとに地域の特徴を紹介します。

日時・内容・会場

9月7日(土) 「旭森地区の歴史」(旭森地区公民館)

9月28日(土) 「南地区の歴史」(南地区公民館)

\*各回とも、10時～11時30分

\*資料代 各回100円

\*当日受付(事前申込み不要。先着順)

\*「古文書のみかた」は事前申込制です。  
\*新年は1月1日から開館します。

## 金亀玉鶴



## 『梅若実日記』に見る井伊直忠の演能

江戸時代、能が幕府の式楽（公の儀式で行う舞楽）と定められて以来、將軍家をはじめ諸大名家では、多くの能役者を召し抱え盛んに演能を行いました。井伊家でも四代直興（一六五六～一七一七）が五十五人もの能役者を一斉に召し抱え、十代直幸（一七三二～一八九）、十一代直中（一七六六～一八一三）は、喜多流宗家に入門して能の修養に努めました。十三代直弼（一八一五～一六〇）も、能〈築摩江〉や狂言〈鬼ヶ宿〉を自作する程、能に造詣が深かったことが知られています。

このように井伊家当主の多くが能を好みましたが、中でも特に能を愛好し、生涯、能に打ち込んだのが、十五代直忠（一八八一～一九四七）です。東京の井伊家本邸（麴町一番町）に能舞台を構え、観世流の梅若万三郎（一八六八～一九四九）や六郎（一八七八～一九五九）に師事して稽古に励み、自らも舞台に立ちました。その腕前は、近代を代表する数寄者高橋箒庵



狩衣装束の井伊直忠

（一八二六～一九三七）に、早業物に優れ、演目によってはプロも恐れ憚って避ける程と、賞賛されるものでした。しかし、直忠の演能に関するまとまった資料はなく、いつ、どこで、どのような舞台に立ったのか、その全体像は明らかでないのが現状です。

そこで注目されるのが、万三郎の父梅若実（一八二八～一九〇九）の記した『梅若実日記』（以下『日記』）です。実は、『明治の三名人』と謳われた近代を代表する役者であり、明治維新後に衰退した能楽の復興を支えた重要人物。直忠は、実にも教えを受けたことから、『日記』にしばしば名前が登場し、中には演能に関する記事も確認されます。

最初に直忠の名前が見えるのは、明治三十一年（一八九八）九月七日。「番町井伊様より御使ニテ若殿（直忠）事明日より御稽古始めニ相成二付万三郎并二竹世（二世実の初名）ニ御頼ニ相成」（一）内筆者注とあり、十七歳の時に万三郎に師事し始めたことが分かります。以後、最後の日記が記された明治四十一年十二月まで、実の晩年にあたる記事に直忠の名前を見ることができません。

直忠は、父である直憲の死去（明治三十四年正月十一日）により井伊家当主となった後も稽古を続け、同三十九年十月十七日、梅若家の舞台で催された素人能にて、〈紅葉狩〉のシテを勤めます。この時、直忠は二十五歳。管見の限り、これが自邸以外での初舞台であったようです。前日には直忠自身が梅若家に赴き、大鼓、小鼓、地謡と共に稽古を行ったと『日記』にはあります。入念な準備の甲斐あつてか、直忠の〈紅葉狩〉は「舞に如何と思はれし所ありけるが、総体の出来は悪からずと拝見したり」（『時事新報』同年十月二十三日）と、初舞台ながらまずまずの好評価を得ました。

これを皮切に、直忠の演能記録は一気に増加します。梅若舞台の素人能を中心に、明治四十年には六回、

同四十一年には八回、舞台に立ったことが『日記』に記されます。素人能とは、能役者に師事した華族や政財界の名士つまり素人がシテを演じ、ツレやワキ、地謡、囃子などを玄人が勤める演能のことです。梅若舞台ではしばしば門人による素人能が催され、直忠はこの二年間に開催された全ての回に出演し、〈小鍛治〉〈土蜘蛛〉〈熊坂〉〈菊慈童〉〈竜田〉〈百万〉など、十三番を演じました。

加えて、明治四十年三月三十一日には、靖国神社の能舞台で催された黒田長知・井伊直憲らの追善能で、〈敦盛 二段之舞〉と一調（打楽器奏者一人に謡い手一人が曲の一部を演じる形式）〈杜若〉の太鼓、翌年六月七日には、同舞台の九条道孝追善能で〈大江山〉を演じたことが、『日記』から分かります。後者は、明治天皇の嫡母で能楽の愛好者であった崇照皇太后の行啓もあり、直忠はその御前で舞台に立ちました。当時、能を嗜んだ華族・名士は多いとは言え、皇族の前で舞台に立った者は決して多くはありません。

以上のように、『日記』からは、直忠が十七歳で万三郎に師事したこと、そしてその七年後には、様々な演目を観衆の前で演じることのできる実力を身につけていたことが分かります。また、自邸においても、万三郎ら呼び寄せ、三十六番の舞囃子（曲の後半のみを演じる形式）を、早朝から夕方五時までかけて一人で演じた（明治四十一年九月十三日条）ことが、『日記』には記されています。単なる趣味の域を遥かに超えた、直忠の能への熱中振りが伺える興味深い記事と言えるでしょう。

玄人既の実力を持ち、様々な舞台にも立った直忠は、近代能楽史を考える上で重要な人物の一人です。今後は、直忠が能を通じてどのような人物と交流を持っていたのか、そのネットワークにも注目し、直忠の能について考えていきたいと思います。（茨木 恵美）